

《担当者名》 鎌田樹寛[t.kamada@hoku-i-ryo-u.ac.jp] 本家寿洋

【概要】

本演習では、特論で講義された内容に基づいて、作業行動学観点に関連される学際的諸学問の最新状況の検討を通して、作業機能障害に関する新たな改善方法や介入アプローチ・評価法の開発等について探索することを目的とする。

【学修目標】

一般目標

特論で講義された内容に基づいて、作業行動学観点に関連される学際的諸学問の最新状況の検討を通して、作業機能障害に関する新たな改善方法や介入アプローチ・評価法の開発の可能性や必要性等について探索する。

行動目標

1. 行動理論の作業療法への適用や応用について説明ができる。
2. 社会的学習理論や社会的認知理論の作業療法への適用や応用について説明ができる。
3. 構成主義理論について説明ができる。
4. 動機づけ理論について説明ができる。
5. 損傷脳の回復過程を考慮し、作業機能障害からの改善方法について、仮説の立案ができる。
6. ナラティブアプローチを応用した治療の可能性について、仮説の立案ができる。
7. アクションリサーチの1つの手法であるソフトシステム方法論が説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1) 8	文献抄読	心理・行動科学（特に動機づけや行動変容）に関する最新研究レビューや論文抄読を通し考察を深め、討論を通しながら、作業機能障害の状態から改善され得る新たな適用や応用方法について、その可能性を吟味する。	鎌田樹寛
9) 15	文献抄読	脳・神経・障害科学及び、ナラティブ・現象学アプローチ等に関する最新研究レビューや論文抄読を通し考察を深め、討論を通しながら、作業機能障害の状態から改善され得る新たな適用や応用方法について、その可能性を吟味する。	本家寿洋

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

プレゼンテーション20%、討論での取り組み50%、レポート30%

【教科書】

使用しない(適宜資料を配布)。

【参考書】

早稲田大学複雑系高等学術研究所編 「複雑系叢書～身体性・コミュニケーション・こころ～」 共立出版 2007年

【学修の準備】

関連の文献等関係資料について、理解が深められるように整理・統合すること(予習・復習各80分)。

【実務経験】

鎌田樹寛（作業療法士）、本家寿洋（作業療法士）

【実務経験を活かした教育内容】

実務経験を通した作業行動学的観点からの課題や問題解決につながる研究指導を行う。